

開高健



夜と陽炎

耳の物語 **

よる かげろう
夜 と 陽 炎

耳の物語**

新潮文庫

か - 5 - 23



平成元年十二月十日 印刷
平成元年十二月二十日 発行

著 者 開 高 健たけし

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 会社 新 潮 社

郵便 番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三)二六六一五一

編集部(〇三)二六六一五四〇

振替 東京 四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛にご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Takeshi Kaikô 1986 Printed in Japan

ISBN4-10-112823-5 C0193

新潮文庫

夜と陽炎

耳の物語**

開高健著



新潮社版

438r

夜

と

陽^{かげ}

炎^{ろう}

耳
の
物
語

最高の書物とは、読者にわかりきっていることを語ったものだ、彼は悟ったのである。

G・オーウェル『一九八四年』

焼跡が消えた。

ある日、町を歩いていて、ふと眼をあげることがあり、廢墟と荒野が消えたことを痛感させられた。どこもかしこも道路が狭くなり、赤くなく、視線が、壁や、ドアや、窓でさえぎられて、地平線がどこかへ消えてしまった。黄昏になると、見わたすかぎりの赤い荒野のあちらこちらに防空壕があつて、入口から細い炊煙がたちのぼり、七輪のまわりで子供が歓声をあげてころげまわったり、モンペ姿の母がうなだれてのろのと穴に出たり入ったりという見慣れた光景がどこへいつても見られなくなっていた。無辺際だった瓦礫の荒野は区切られ、細分され、コンクリートに蔽われている。家とビルでぎっしりと埋められ、市はたちあがつて肩を聳やかしたり、両足を踏ん張ったりしている。風や雨は山野のそれのようであり、骨を噛む力も意志も失っている。市は全裸ではなくなり、たとえば天王寺一帯は丘であることが肉眼に見えなくなり、その頂点であるはずの駅前に佇んでも、もはや地平線にゆつくりと沈んでいく夕陽を直視することができない。

まるで手品のようなものである。あれだけの異変を消してしまうには何年間かにわたって膨大な

数の人と物が動員されたはずで、それを毎日毎日、つぶさに目撃していたはずなのに、何ひとつとして思いだすことができないのだ。一切の転変ぶりにあらためて茫漠（ぼうばく）とならされるが、その過程をまったく思いだせないでいる自身の空白ぶりにとも茫漠（ぼうばく）とならされる。ひたすら外界におびえたり、すくんだりして暮してきたはずなのにその外界が見えないのだ。これには驚いていいはずなのだが、どう驚いてよいのか、その手がかりすらない。まるで藪（よもぎ）のなかで眠りこけていたみたいである。荒野の記憶はつい昨日の黄昏時のことのように思いだせるけれど、すでにそれは博物館物となったらしかった。と、するなら、まだ二十代前半なのに、自身すらすでに博物館物となってしまったのではあるまいか。藪（よもぎ）のなかで眠りこけつつ乾（ひ）からびてしまったのでは？……

一人の機敏な男が、もはや戦後ではないといいだし、それが流行語になっている。焼跡で汗を流したり、工場で油まみれになったり、資金繰りに日夜狂奔したりした男たちが大状況を現出したのであって、機敏な男はその尻馬（しりうま）に乗ったにすぎなかったが、深夜の独白（どくはく）が流行語になってしまうと、人びとはそれをキーとしてもうひとつ新しいドアをひらき、猥雑（わいざつ）だけども老大なエネルギーを解放しつつあった。軍隊毛布（きふ）をざくばらんに切ってハーフ・コートにし、いかつい軍靴（ぐんか）でのろのろと歩きまわっていた群集は消えた。闇市（やみいち）の放埒（はうらち）な叫喚（きょうわん）は消えて、市場の夕刻の健全な叫喚（きょうわん）となり、暖をとるための駅前の焚火（たきび）もなくなった。大群集はターミナル駅の朝と夕方のサラリーマンのそれだけとなり、郊外電車は車軸受けの鉄箱から

油煙をたててくすぶったり、乗客が窓から入ったりということはなくなり、窓はすべて板やダンボールにかわつてガラスになり、誰も割るものがなくなつた。町には国産のルノーの四ツ馬印（4CV）がかけまわり、「カブト虫」と呼ばれて愛され、どこかで酔っぱらつた柔道選手が体当りしたら自動車そのものがひっくりかえつたという噂があつた。家庭にはようやく電気冷蔵庫が出回り、「神器」という評判である。酒飲みたちはどんな夜ふけにへべれけになつて家へ帰つてもピンとした角氷がいくらでも手に入るといつことを知つて、雀躍した。焦熱の咽喉と干からびた胃を鎮静させるのに、それまでなら暗い台所で水道の水を一杯ひっかけるだけだつたのが、作りたての冷んやりとしたアイス・ウォーターが心ゆくまで、女房の叱言ぬきで飲めるようになったのである。女房は女房でそれまでのようにいちいち氷屋へいつて重い氷塊をはこんでもらうように注文しなくてもよくなつたので、亭主の口の怪臭にはうんざりしながらも、いちいち寢床から起きださなくてもよくなつたので、口ではあいかわらずブツブツいいながらも、内心ではホクホクしていた。技術の変化は習慣の変化を呼びだし、それは舌にまで及ばずにはいられないから、ドロク、マツカリ、バクダン、焼酎に飽いた男たちはつぎの何か新鮮なドリンクを求めずにはいられなくなつていた。新鮮でドライで、しかもお脳にクラツとキツクのくるやつ。そして薄暗い掘立小屋でもつれあつて飲むのではない場所を……

テレビはまだ登場していなかつたけれど、ラジオではすでに「民放」が開始されていて、

あらゆるスポンサーがあらゆる文体で人民の耳たぶにとどまろうと、狂騒を開始していた。コマーシャル・メッセージ、CMというものが氾濫（はんらん）しつつあった。誰しもに軽視されながら誰しもが記憶せずにはいられず、何年かたつてふりかえると当時の新聞や雑誌のどんな名論文よりもはるかに皮膚に融即して自身の日々を喚起させられるたわごと、図太くて破廉恥（はけんち）なくせに泡（あわ）のようににはかないバカ、鋭いくせに無氣力で無署名のでたらめ、これが不逞（ふてい）に、浮き浮きと、登場しつつあった。

洋酒会社の宣伝部員になってこの未開の学田におずおずと鋏（くわ）を入れることになった。もともとルンペン時代に女の口ききで社長を紹介され、見よう見真似（みまね）で書いた原稿をはこびこんで、一枚五〇〇エンで買ってもらっていたのである。それでドライ・ミルクを買う一助としていたのだが、出産後、女が会社勤めを苦痛に感ずるようになったので、交替で入社することになり、正式に社員として採用されたのだった。“文案屋”の見習いとなってスタートしたのである。“コピーライター”という呼びかたはまったく知られていず、身辺の誰一人として口にするものもなく、業界の雑誌でもまったく見かけることがなかった。たまにアメリカの広告界の雑誌などを見ると“コピーライター”という単語を発見し、文案屋のこととわかったが、“コピー”をふつうに“複写”と解釈して、明けても暮れても似たようなことばかり書いているので複写をとっているようなものだからそう呼ぶのだろうぐらいに理解しておいた。そうとってみると何やらヒリヒリした皮肉が感じられて、トイレの暗がりにはやが

みこんで思いつめているときなど、ふと微笑できた。

会社は毎朝、九時に始つて五時に終る。一階に宿直室のような小部屋があつて、無口なじいさんがウドンを用意している。社員は食券をさしだし、自分でウドン玉を大釜おおがまの湯ですすいでドンブリ鉢ばちに入れ、じいさんの作ったダシと薄揚げの煮たのをほりこんで、食べる。ときどき社長や重役が気まぐれを起して入つてくると電流が走つてみんな黙りこんだ。退社時刻は五時だけれど、何となくグズグズして六時か六時半まで待ち、梅田まで歩いて地下におりてトリスバーに入り、何杯かひっかけるといのが習慣になつた。宣伝部の部屋にはウィスキーでもブランデーでもごろごろと瓶びんがあるけれど、そして五時以後ならいくらでもおっぴらに飲めるけれど、一つの心理があつて、身銭を切らなければ飲んだ気になれないのである。映画会社の試写室でタダで見る映画がつまらないのと似た心理である。サラリーマン暮しをすると、上役や仲間と口をきかなければならず、内気の過敏症には苦痛でならないが、酒にそそのかされて、少しづつ殻からから外へ歩きだすことができるようになった。

毎月、月末になると、規則正しく月給をもらえることになつた。その額は他社とくらべて多過ぎもせず少過ぎもしない。暮しの必要条件はどうにかみたしてくれるけれど、十分条件をみたすことにはならない。しかし、つましく、おとなしく、何事も人並みにやっていたら、忍耐についてはいささか訓練が積んであるので、何とかやっていたける。ブタの尻し尾ぼを食べなくてもいいし、焦躁しやうそうの青い火で正面とお尻の下からあぶりたてられなくてもよくなつ

た。おかげで卑屈さが少しずつ下潮さげしおのようにひきはじめ、かわりに月賦げつふで背広一式を買おうか、それとも電気冷蔵庫にしようかという打算がところを占めるようになった。それまではころそのものが鬼火と感ぜられ、すべてが非定形でとらえようがなかったのに、何かの凝固剤を注入されたかのように形が、数字が登場して、威力をふるいはじめた。氾濫であった水がパイプのなかを流れるようになったのである。それは何よりもまず酒の飲み方にあらわれた。それまではミナミの千日前のパイ飲屋で焼酎をすすりつつドテ焼の串くしを頬張ほおばったものだけだ、そのあいだのべつにポケットのなかの銭を指さきでかぞえていなければ安心できなかった。そして心細さがわくわくと脛すねを這はいのぼつておちおちとしていられず、一杯目ですんだところで二杯目を注文したのかどうか、苦慮また苦慮であった。しかし、いっぱいのサラリーマンになってからは、いきつけの店ができたうえにツケがきくようになったので、少くともカウンターに肘ひじをつくことができるようになり、どう肘をついたものかと姿勢を考えることができるようになった。酒のサカナの最高はドテ焼でもなければ噂さに聞く西洋松露入りのストラスブルのフォア・グラでもなく、いささかのゆとりをもつて肘のちよつとそばにおいた自身のころであるということに気がついた。仕事の出来ぐあいや、人間の出入りや、うまくわたりあえたかどうか、いつもどこかにほろにがい味の漂うその日一日の後味を聞きつつ飲むものであるらしいと、やっと端緒がつかめたような気がした。本の構造でいえば、どうにかこうにか“はしがき”や“序”が読めるようになったところである。

しかし、だからといって、古人のいう“安心立命”からは、はるかにこころは遠かった。皮を剥ぐと、すぐにつきの皮があらわれる。あらわれたままでじっとしていてくれたらいいが、その質と量が見きわめられないうちに、おれをどうしてくれるのだと、せがみはじめる。一つの原則をどうにかこうにかここに強制して納得させたいと思つたら、思いもかけない例外がつぎつぎに登場してくる。原則に執っているのか、例外に執っているのか、それがわからなくなり、ときあつて沸騰してくると、原則そのものが朦朧となつてしまふ。ときあつてどころではない。のべつである。崩れたところを容赦なく足もとに吹きつける冬の鋭さでどうにかこうにか支えてドテ焼を頬張つていた身分が、まがりなりにも“バー”に出没、明滅するようになると、飲みつけたグラスが新しいグラスに変わった瞬間、冷んやりと硬くひきしまつて気持ちのいい唇への一触、その瞬間に、生涯はこれできまつてしまつたのだという思いに襲われる。何もかもが見えてしまうように感じられる一瞬があるのだ。それが何度もかさねていくうちに、一瞬どころではなくなり、夜の地下の酒場で発火したものが白昼に燃えうつつて、新聞用の広告のたわごとをあれかこれかと苦吟しているさなかにも、顔をつきつけてくるのである。その顔はまじまじと直視するしかなく、眼のそらしようもない。朝の十時か。午後の三時。いたたまれなくなつて席をたち、階段をおりて、歩道へ出ていき、いいかげんな喫茶店へいって、コーヒーをすすったり、甘ったるいケーキを食べたりして、眼をそらすことにふける。しかし、喫茶店から出てオフィスにもどるとき、直視の鋭さは避

けられたとしても、いやらしい後味はのこっていて、どこまでもつきまといてくる。一生、
こうなのか。ただ繰り返すだけなのか。昼のうちは会社でたわごとを書くことにふけり、
夜はバーでぐずぐずしたあと家にもどって本を読むだけなのか。それで終っちゃうんだな？
……

毎朝、淀屋橋よどやばしの地下鉄の出口から歩道へおしだされ、とことこ歩いて、一つの橋にくる。
それをわたったすぐのところにはベチャ・ビルがある。会社の古風で小さな、暗い入口がある。
そこへ入るまえに橋の上に佇んで、ちよつと待つ。堂島川は兩岸をしつかりコンクリートで
固めてあるので、“川”というよりは“溝”である。両側には草もなければ、土もなく、水
中には藻もが生えていないし、乱杭らんぐいも見られない。しかし、橋の手すりにもたれてしばらく待
っている、川下からよちよちと一隻せきの手漕こぎの古舟があらがってくる。おっさんはあちらへ
よろよろ、こちらへよろよろと一本槽さうを操って寄っていく、水中から木の枝をたばねたオダ
をひきあげる。オダの下に網を持っていつてオダをバタバタふると、網にウナギが落ちる。
そのウナギをおっさんは破れかぶれの竹籠たけかごにさりげなくほりこみ、ゆらゆらと舟を漕いで上
流へのぼっていく。この川漁師を見るのが毎日の愉たのしみとなった。少し早く橋につくと、お
っさんと舟が見えるまで、いつまでも待ち、ウナギがたくさんとれるかどうかを見とどけて
から、橋をわたって会社の暗い入口へ入っていくという習慣になった。ただ何となくそうせ
ずにいられなくなったのでそうすることなのだが、ウナギが二匹か三匹かと気になり

はするものの、清潔な朝の日光とよごれた水という光景のなかで、おっさんの腕や、肩や、腰がどううごくか、それを見とどけずにはうごけない。もしおっさんが予想外の数のウナギをとると、何かいい日になりそうな気持ちになって歩きだすことができる。

同人雑誌はとつくに解散し、同人はちりぢりばらになり、古寺に集って焼酎をすすりながら議論に没頭するということもなくなつた。同人雑誌を送つて思いがけず東京の佐々木基一氏から励ましの手紙を頂き、何か書けたら送つてみるようにとの言葉を頂いたので習作をいくつか送り、『近代文学』に発表してもらつたが、活字になつたのを読みかえしてみると赤面するしかない幼稚さであつた。その『近代文学』も発行が間遠になり、とぎれがちである。何よりかより、書きたい衝動が消えてしまい、何を、どう書いていいかもわからず、書けないことの煩悶や焦躁も感じない。もちろん作家になりたいという気持ちの起りようがなく、ウィスキーの宣伝文を書くだけが精いっぱいのところである。ほかには何の技も能もないので、これにしがみつくななく、一生酒浸りで終つてしまうことと、思いきめていた。

毎夜、毎夜、本を読むことだけは中毒になつたみたいで、手あたり次第にめちゃん乱読、雑読にふける。そして何を読んでも、すべては書かれつくしてしまつた、あらゆる発想で書きたいように書かれてしまつたと思うしかなかった。ごくたまに何か書いてみようかと思うところがあるが、書きだしの一語、一行はことごとくどこかで読んだ他人の文ばかりで、そのとめどなさに圧倒され、窒息してしまつて、ペンをとりあげることすらできない。それまでと